

田とは重なる。

気になった第二点は、同じ「明治の漢学と中洲」の章、「経済と倫理の一致」の節が「中洲の独自の思想と言えば義利合一論であろう」と書き出されるところである。義利合一論が中洲の持論の大きな一つであることは、夙に喧伝されているところであるが、果たして「独自」と称して可か。

筆者は最近機会あって、朱熹に対峙した南宋の陳亮の事功重視の思想を取り上げ、「朱熹よりの義利双行という表現による批判を拒否し、金銀銅鉄を攬ぜ、鎔して一器と作さんと欲した陳亮の主張は、まさに義利合一そのものであった」と述べた。「行動の指針としての『論語』―義と利の間」、山川図書出版『公益の追求者・渋沢栄一』一九九九、三、所収）三島・渋沢の義利合一論の祖型を考えるなかでのことである。

またこれは前の拙文のなか紙幅の関係で触れ得なかったのであるが、中洲自身に次の論あり、興の惹かれること頻りなのである。中洲は、明治二十九年七月、東京学士会院における「仁斎学の話」と題しての講演のなかで、「シナ学の根元に」「気学」「人造学」「理学」の三派ありとする非常にユニークな論を展開、反理学としての陽明の気学の存在を称揚しつつ、

其後明末は此の学を奉するもの多く、呉廷翰と云ふ人も、其一人にて吉斎漫録を著し、太極は氣にて理に非すと云ふ説を主張したり、其書か本朝に舶来し、仁斎は之に本つき、一元氣の説を唱へ、南朝頃より徳川氏中葉まで行はれたる宋儒の理学を打破れり、余故に仁斎学は陽明の気学に淵源

すと云ふなり、然るに仁斎か吉斎漫録に本つきたることに、段々回護の説あり、此書か舶来せざる前、已に気学を唱へ居たり、又吉斎は氣を唱へ、仁斎は元氣を唱へたる故、異同ある杯との説あれとも、是は畢竟仁斎最負の門戸見と云ふもののみ、縦令一步譲りて其実暗合とするも、前に同説あれば、後に唱へたるものは、前説に由ると看做さるを得ず、（『中洲講話』文華堂書店、一九〇九、所収）と述べているからである。

興の惹かれる第一は、呉廷翰『吉斎漫録』には、別途、「義と利は原是れ一物、更に分別無し」「義利亦只是れ天理にして、人欲は天理の外に在らず」などと見える事実を照らしてのこと、そうしてその第二は、いみじくも中洲が「暗合とするも」「前説に由ると看做さるを得ず」と述べている点である。呉廷翰の義利合一説と中洲のそれを「暗合」とするか否かに拘らず、一般論として、朱子学的義利先後説への反駁としての義利合一的思考態度は、歴史上、本来他にも有り得べく、また事実有ることなのである。ともあれ、このたびの出色の三島中洲論の出現が、この分野の研究水準押し上げの契機となることを祈りつつ筆を擱く。

（松川）

○矢吹邦彦著『ケインズに先駆けた日本人―山田方谷外伝―』

平成十年四月 明德出版社刊 A5判 三九四頁

現在、日本は経済不況に喘いでいるが、昭和初期の不況を救う経済理論を持って登場したのが、イギリスの経済学者ケインズである。このケインズより約一世紀前に、それと同じ考え方で財政

の建て直しをしたのが山田方谷で、本書の著者は先に『炎の陽明学―山田方谷伝―』を著して、方谷の人となりを描いているが、本書は方谷を支えた人々を描いたものである。

第一部で方谷の財政上の施策について述べているが、本書の主眼は第二部の「方谷を支えた同志達」である。まず方谷の仕えた備中松山藩の藩主板倉勝静、次は方谷の高弟三島中洲。三島は明治十年二松学舎を創立。そこで夏目漱石は三島から漢詩漢文を学んでいる。また渋沢栄一の『論語』とソロバン」の生き方も三島の教えからきている。3番目に、「牛籠舎」（方谷の私塾）に学んだ人々。ここに方谷の一番弟子と言われる進鴻溪、筆頭家老の大石隼雄等。大溝藩から方谷によって引き抜かれて備中松山藩に仕えた川田甕江。最後に矢吹久次郎。方谷の門に学び、方谷の娘小雪を養女とし、また息子発三郎の嫁に小雪を迎え、姻戚となって、方谷に財政援助をした人である。

最後に、山田方谷略年譜。

本書は、学術書というスタイルでは書かれていないが、歴史的事実と著者宅に伝わる史料をふまえて書かれているので、興味つきないものがある。全体に、前著の『炎の陽明学』をふまえるだけでなく、そのまま引用しているところもあり、その中で誤っていたところは正しているところに、著者の史実に忠実な態度が窺われる。著者はこの後に「方谷の手紙と逸話」を書く予定であったが、これは今後の課題とするということである。

※三島中洲については、三島正明『最後の儒者―三島中洲』参照
○岡田武彦著『王陽明抜本塞源論―万物一体思想―』

平成十年九月 明德出版社刊 四六判 一五九頁

本書は、現在の日本の社会風潮を憂えた著者岡田先生が、「人が人間としての本来の心を失って、功利の念に駆られ、私利私欲に走るようになった。この功利の念を心中から除去する最もよい教訓として、王陽明の「抜本塞源論」を繰り返し朗誦するように」と書かれたものである。

最初の序章は①王陽明の生涯と思想、②王陽明と万物一体論、③伝習録と抜本塞源論から成り、「抜本塞源論」を理解するために分かりやすく説いたものである。

第一章は「抜本塞源論」の書き下し文、語釈、口語訳、そしてこの文の理解を深めるために余説がおかれ、そこで中国思想史上の問題点から現代的意義までが説かれている。

第二章は書き下し文と原文。前章まで読んで王陽明の思想を理解したら、その核心ともいえるべき「抜本塞源論」を声を出して朗誦し、真に身をもって体得することを願ってのものである。

現代人は声を出して読むことや、暗誦することを殆どしなくなった。特に、暗記や暗誦するということは、詰め込み教育のように見なされ、受験教育の弊害とともに葬る傾向があるようだが、昔の素読ではないが、暗記するほど読み、また声を出して朗誦することの意義は再評価する必要があるのではないか。

○吉田公平解説・訳・注『洗心洞笥記―大塩平八郎の読書ノート』

上下巻（タチバナ教養文庫）

平成十年九月 たちばな出版刊 文庫判上巻三七六頁、下巻三六九頁。

『洗心洞筭記』には、①岩波文庫（山田準）、②日本思想大系（福永光司）、③『日本の名著』（松浦玲）そして本書がある。このうち①と②は、原文、書き下し文、注釈というスタイルである。口語訳がついているのは、③と本書で、ともに注はついているが、この2書の大きな違いは本書には書き下し文がついてることと、『論語』や『孟子』などからの引用文を③は書き下し文にしているのに対して、本書は全て口語訳していることで、より多くの、そして現代の文語的表現を苦手としている人にも読んでもらおうという意図が窺える。なお上巻には、洗心洞筭記案内、下巻には大塩平八郎の陽明学という解説を付している。

著者は『陸象山と王陽明』という大著をものしている陸王学の大家であるが、学問を一部の専門家だけのものとしておいてはいない意義が薄いという主張の持ち主である。その実践として本書ばかりでなく、このタチバナ文庫に『伝習録』や『菜根譚』を公にしているとともに、日本の思想へも関心を深めたのが本書であり、現在は讃岐の儒者林良斎の全集に尽力している由。

○岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第5巻欄外書類（2）

解説・注解 山崎道夫

平成十年八月 明徳出版社刊 A5判 三九七頁

「欄外書類」（2）は『伝習録欄外書』であり、一斎が『伝習録』の欄外に自説を書き入れたもので、我が国最初の『伝習録』の注釈書である三輪執斎の『標註伝習録』に次いで出た注釈書である。本書は、解説に続いて、『伝習録』の本文（小字）、欄外書の書き下し文、それに山崎先生の詳しい頭注、最後に欄外書の

原文がついている。『伝習録』を読むに当たって、避けて通れない注が、非常に詳しい注釈で、特に先生は、佐藤一斎を陽明学派でなく、朱子学派と考えられる立場をとられることは問題があるとしても、朱子学等をも踏まえて理解できることになったのは有り難いことである。

○岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第十三巻 腹曆上

解説・注解 池上博之

平成十年十二月 明徳出版社刊 A5判 一二四九頁

「腹曆」は佐藤一斎の自筆日記で、本書は、天保9年から弘化5年（嘉永元年）までの十一年間の十一冊の解説と影印である。解説と注釈が三百三十頁。あとは影印。一斎はこれ以後、没する安政六年までの二十二年間の二十二冊を残しているが、これは今後出版の予定。

書き出しの天保九年は、一斎六十七歳、大塩中斎が自刃した翌年に当たり、『言志晩録』を書き始めた年である。

非常に簡単な記録だが、少し興味を引くところをあげよう。書き始めてから三年目の天保十二年七月、林述斎が亡くなって、一斎が幕府の儒官に登用された所は次のようになっている。

十四、晴 朝六半時頃、内史公危篤。無幾属紼。此夜大斂。

十五、晴 中元 葬埋用意相談。拜柩。

（十一月）廿六 晴 五時今井堀右衛門同道登城。四半時過躰躡之間、水野公申渡御儒者被仰付御老若廻勤。

というような文であり、一斎の日頃の行動や事跡を証するものである。

（以上、正田）